

いかにするかに

千葉県千葉市 田中 三希

電車が動き出した途端、カア、カア、と何羽もの鴉が、まるで静かな水面に石を投げ入れたかのように次々と鳴き出した。平日の昼過ぎ、小湊鉄道月崎駅のホーム。電車から降りてきた人たちの、決して大きくはない声すら懸命に掻き消さんとするそれに、私は思わず立ちすくんだ。

どこことなく罪悪感を覚える。久し振りに足を踏み入れた月崎駅は、暖かな春の日差しの中でも冷ややかに映った。

変だとは思っていた。車内から見えた、何羽かの鴉。視線を感じてスマホから顔を上げたとき、必ず目が合った。電車が動いている際中だったからほんの一瞬、それが何度も。私を責めているようだった。

最後にこの駅に来たのは、中学一年生のときだった。父の仕事の都合で、私は高校入学と同時に神奈川県へ引越していた。それ以来、この辺りには一度も訪れていない。千葉県には祖父の家があるわけでもなく、昔の友人とはみんな疎遠になってしまっていて、行く機会が無かったのだ。

今年の三月まで、私は受験生だった。大学受験だ。どうしてもやりたいことがあって、ちょっと無茶な大学を第一志望にしたのだが、結局は落ちた。そのかわり、そこと比較的近いことを学べ

る第二志望の大学には受かったので、浪人はしないことにした。母の実家がひよんなことから借金を抱え、それを両親が負担することになったため、「大学のお金はなんとかするが、浪人はやめてくれ」とのことだった。

去年の秋にここへ来ればよかっただろうか。そう考えて、すぐに打ち消した。受験勉強があったからという理由を除いたとしても、あのことがあってぴったり五年目にここに来る必要はなかったのだろう。

駅の改札口。重要指名手配犯のはり紙からそう離れてはいない場所に、もう一枚。

「川崎真生（失踪当時十三歳）」

二〇××年九月×日、当駅の防犯カメラに映ったのを最後に行方不明。僕を見つけて！」

……マオ。

彼は中学の同級生で、それなのにあの年の夏休みまで、ほとんど顔を合わせたことがなかった。不登校だったのだ。小学一年生のときいじめに会い、それ以来学校に来なかった。小学生のときはフリースクールに通っていたが、中学生になったあたりから行かなくなったらしい。

私はあの日、彼とここにいた。そしてマオが一人で電車に乗って行ってしまおうのを見ていたのだ。このことは誰にも言っていない。

「自分と同じ選択をしたい人がいるかもしれないから」と口止めされていたのもあるが、私は自分のために話さなかった。あの夏

の思い出を、誰にも冒されなくなかったから。

あの日に言われたことは、もう一つ。

「一生の別れなんかじゃない。いつかきつと、思わぬところで僕たちが顔を合わせることもあるよ」

高校の卒業式を終え、帰路につくため電車に乗りこんだとき、私はマオのことを思い出した。彼のことを考えると、今の自分の状況がやりきれなかった。でも、だからこそ会いたくなかった。

行こう、月崎駅へ。

月崎駅にならきつといる。そう信じて、ここへ来ることを決めた。

川崎真生は変な人、というのが私たちの常識だった。私と彼は小学校が違うため、中学校に入学した時点では彼と面識がなかった。それでも、小学生のときにはすでに彼の存在を知っていた。

「カワサキマオって子知ってる？」

「俺、そいつと同じ学校のやつと友達でさ、話は聞いたことある」

「私もその学校に友達いるんだけど、その子と同じクラスだったって」

「いじめられてたのに、堂々と外を歩いているって本当？」

「その子がカラスになつかれてるって本当？」

こんな感じで、昔からうわさをされていたからだ。他にも、けっこうイケメンであるとか、電車の中で急に姿が消えるのを見たとか、様々なうわさがあった。そんなミステリアスな存在感から、彼は都市伝説の一種であるかのように扱われていた。

そんな彼と初めて会ったのは、中学一年生の夏休みのときだった。

中学生というよりは小学七年生に進級したような当時の私は、少しバカだった。昔からどこかうかつなところはあった。それが中学生になっても続いて、結果、他人のデリケートな部分をズバッと指摘してしまつたらしい。私としては何のことかさっぱりわからなかった。でも、あるときからガラッとみんなの私を見る目が変わって、クラスで浮いてしまつたのは確かだ。

そんなふうだったから、夏休みの予定も埋まらない。いっしょに遊んでくれる人は少ないし、塾の授業もあまり入れてなかった。

とにかく暇だったので、私はよく一人で出かけた。両親は共働きで、私が日中何をしているかなどわからない。学校でのことも、忙しそうな両親には言えていなかった。

あの日は、たまには遠出しようと思いついた日だった。夏休みの最初の数日は、町はずれに行ってみたり、普段は通らない道を通つたりした程度だったが、早くも飽きてきていた。町内に限定すると、どうしても見覚えのある景色ばかりが目に入り、新鮮味に欠けた。途中でばつたりクラスメートと顔を合わせてしまうのも気まづかった。だから貯まっていたお小遣いを持って、最寄りの駅である五井駅へ行ったのだ。切符を買って改札を通ると、すぐに「電車が参ります」というアナウンスが聞こえた。ホームに着いた途端に、視界に列車が入ってきた。

私は昔から小湊鉄道のこの車両が好きだった。上が薄橙、下が赤というツートンカラーは温かみがあって、鉄道マニアでなくて

も「いいな」と思った。たまにニュース番組で見る都会の電車は光沢のある銀色で、カッコイイとは感じていた。でも、あれを見ていると心がひんやりとしてきて、電車も、それに乗り込む人々も何かの機械の一部のように感じられてしまうことがあった。

車両には、他にも数人の客が乗っていた。夏休みだし、この鉄道のいくつかの駅には観光地から近いところもあるため、もう少し混んでいてもおかしくなかった。偶然にも客が少ない日のようだった。

真夏の外気をさえぎり、冷房で涼ませてくれる車内に入った瞬間から快適だった。空いていた席に腰を下ろし、ぼんやりと外の景色を眺めていた。どこまで行くかは考えていなかった。不安になつたらどこかの駅で下りて、そのまま反対側のホームで帰りの電車を待てばいいだろうと考えていた。とりあえず切符と財布をなくさなければOKぐらいの意識だったように思う。私はひたすら、次から次へと流れていく見慣れない町の景色を眺めていた。だから、それとは知らなくても「入口」をしつかりとこの目は捉えていた。

最初は、「あ、鴉が飛んでる」とぼんやり思っただけだった。線路から数メートル離れた辺りを二、三羽ほどの鴉が集まって飛んでいた。

鴉って群れで飛ぶもんだったかなあ。

そんな漠然とした小さな違和感が、ぼっかりと頭の中に浮かんでいた。

おかしいと思ったのは、違和感を持ってまもなくのことだった。

二、三羽だった鴉がだんだんと四羽、五羽、十羽と増えていく。心なしか、鴉の群れが電車に近づいたような気がした。私は不安になった。一般的に鴉に良いイメージを持つ人は少なく、むしろ不吉なものだと感じる人の方が多いと思う。そのご多分に漏れず、私もそのように感じていた。

……怖い。

周囲を見渡すと、いつのまにか乗客がいなくなっている。自分以外には唯一、斜め前の席に同年代ぐらいの少年がいるだけだった。それに、知らない人だ。

そのときには、窓の外には初めて比べものにならないくらい多くの鴉が飛んでいた。しかも車両すれすれを並走している。普通の鴉ならそんな飛び方をするはずがなかった。

もはや、窓からの景色は窓を覆う鴉の黒い翼一色だ。体が電車の揺れとは関係なしにカタカタと震えていた。自然と両手は胸の前で組まれていた。

早く帰りたい。

それだけを一生懸命に願っていた。そんなときに、声がかつたのだ。

「大丈夫、怖くないよ」

うつむきがちになっていた顔を前に向けた。声はあの少年のものに違いなさそうだった。なにしろあの車両には私たち二人しかいなかったのだから。

「大丈夫」

彼がもう一度そう言った瞬間。

バツ、と視界がひらけた。

あんなにたくさん集まっていた鴉が、いきなり四方八方に散らばっていったのだ。そして見えた窓の外の景色に、私は息を飲んだ。

「草原だ……！」

見渡す限り一面の生き生きとした緑。地平線が見える広大な草原は、今まで見たことがないものだった。

「ほら、大丈夫だったでしょ。よくここに来られたね」

そう言われて私は、外の景色から彼に目を移した。そこで、初めて彼の姿をまじまじと見たのだった。

その少年は、一言で表すと「美しい人」だった。美人という言葉はたいいてい女性に使われるが、私は彼もその言葉で形容したくなった。色の薄い、肩にわずかにつく長さの髪。陽にあたったところが金色に輝く毛先がきれいだった。切れ長の目と通った鼻筋がすっきりとした印象を持たせる。体格はやや華奢で、中性的な見た目。服装は白いTシャツと淡い茶色の半ズボン。容姿の美しさと服装のシンプルさが合わさって、彼をより現実離れた存在にしていた。

じっと彼を見つめる私を、まだ不安が残っていて口が利けないものと受け取ったらしい。彼は自分の席のすぐ後ろの窓を押し上げた。すると一羽の鴉が呼び寄せられたように中へ入ってきた。彼がすつと右腕を上げると、そこにとまった。

「あれは、祝福さ」

鴉が一声、カアと鳴いた。

「この子たちは僕の友だち。いや、この世界に行けたり、住んだりする人みんなの友だちなんだ」

「……『この世界』って？」

私はようやく口を開いた。

「どうか信じてね。ここ、今さっきまでと同じ世界じゃないんだ。元の世界に居場所がない人たちが呼ばれる世界。僕は『ウラ』って呼んでる」

ありえない。そう思わなかったわけじゃない。だけど信じた。この現実感のない少年には、現実的でない言葉がよく似合う。そう感じたからだ。

これが、私とマオの出会いだった。

その日は『ウラ』の本拠地であるという月崎駅まで行った。元の世界へ戻りたいと思いつつながら電車に乗り込むと帰れると教わったので、もうちょっといてみたいという余裕ができたのだ。なぜか駅の周辺は草原ではなく普通の町だった。

「誰も、いないよ？」

それが町を見た感想だった。

「初めて来た人は、みんなそうだよ。僕るときも誰も見えなかった」

マオは一応、あの辺りに人がいる、ここにこの世界の長である人が立っていると教えてくれるものの、やはり誰も見えない。それどころか人の声も、気配もしなかった。そのことが、ここは違う世界なのだと実感させた。

辺りはけたたましく鳴く蝉の声に満ちていた。鴉も鳴くし、木々のざわめく音もした。それなのに人の気配がないだけで、世界の絶対的なものが欠けているような気がした。帰るとき、ようやく彼の名前を聞いた。

「僕はマオ。川崎真生だよ」

うっすらと感づいていたので驚かなかった。

そのあと私の名前と、同じ中学とクラスであることを伝えたら、彼は大したことじゃないというように「そう」と答えた。

会う日は週に一回、水曜日と決めた。本当はもっと会いたかったが、

「夏休みの宿題しなくちゃいけないでしょ」

と言われると何も言い返せなかった。

だから、私とマオが会ったのはほんの数回なのだ。会うたびにマオはいくつかの駅や町を紹介しては、その土地の公園や建て物でいっしょに遊んでくれた。彼はちょっとしたところも遊び場に変えてしまう。町の小さなビルのオフィスは、机や椅子を使ったアスレチックになった。みんなで自給自足をしている畑に行ったときは、見えない住民とともにミニトマトをどれだけ摘めるか競争して盛り上がった。心の中にはこのことを「大人げないな」と思う部分もあった。けれどもその何倍もの「楽しい!!」という気持ちがある、あつというまにそれらを押し流していった。

「これ楽しいね！」

私が思ったままにそう言うと、マオもとても楽しそうな表情になった。

マオと会っている間、とうとう私は一度も他の人たちの姿がはっきりと見えることはなかった。夏休みの終わり頃によく、うっすらとした影のようなものが見えるようになった程度だった。

「見え方に個人差はあるから、心配しなくてもいいよ」

あるときマオがそう言った。

「でも、なんだか可哀想で。住民の人たち、私たちによくしてくださってるみたいなのに、私はあまりそれに気づけないから」

「気にしないよ、みんな」

そんな会話があったから、畑で住民たちと交流できたときは嬉しかった。

私がマオと会った記憶の中で最も印象深いのは、夏休み最後の水曜日、二人で「ウラ」の森ラジオステーションに行ったときだ。

「ここは『ウラ』の住民たちの憩いの場なんだ。ほら、今日は長もいる。山岸さんも、辺見さんも！」

彼はそう言って嬉しそうに指し示すが、私には影のようなものと、側にある「もりらじお」の看板ぐらいしか見えなかった。

私の反応を見て、彼は少し寂しそうな表情をした。でもすぐにフツと美しく微笑んだ。その頃には私は彼の美しい微笑を見ると悲しい気持ちになっていた。彼のこの表情は、多くの人間が目を奪われるほどのものだと思う。だが、この微笑を見せるときの彼は、どこかよそよそしかった。よそ行き用の、作りものの笑顔。そう思った。確か一度だけ、

「そういう笑い方……」

と彼につぶやいたことがあった。「やめて」とはなんとなく続けられない私に、彼はまたあの微笑をするだけだった。

「どうしたの？」

マオが心配そうにこちらを見つめていた。

「わからないよ」

そう答えた。本当にわからなかったのだ。自分がいったいどうすればいいのかが、わからなかった。

マオはちよつと首を傾げて、「そっか」とだけ言った。

月崎駅、森ラジオステーション。もともとはいちほらアート×ミックスというイベントのときの作品だと聞いた。実は一回もちゃんと見たことがないのだと告げると、

「え、もつたない！　じゃあじっくり見ていきなよ。『ウラ』の月崎駅のはむこうのよりもっと魅力的だと思うし！」

とくしゃつと笑いながらマオは言った。楽しい遊びをしているときと同じ顔で。

「最初にさ、鴉たちと通った草原あったでしょ。あそこ、本来は住宅街があるんだよ。最初にここに来た長おさが消しちゃったの」

マオがストーンと木の枝で作られたベンチに腰かけた。この日も彼は白いTシャツに淡い茶色のズボン。うーんと伸びをすると、ちつとも焼けていない彼の白い腕に、木洩れ日が射した。

「あの人は昔、何十年前前はね、一人ぼっちだったんだって。学校の勉強についていけなくて、同級生にはバカにされて、両親には呆れられて。こんなじゃ立派な大人になれないって。それでとうとう家出したんだって。のたれ死にしてもいいからとにかく

遠くへって、適当に電車に乗ったって」

行きたい、ここではないどこかへ。できることなら、自分が生きてもいい場所へ。でも、どこへ行っても自分は指さされ笑われるのではないだろうか。電車の外にはたくさんの家。そこに住む全ての人間が、自分を笑うのでは……。

「したら、僕たちのときみたいに鴉がたくさん来て、気づいたら……」

草原だった。

何も無い。町も民家も、もちろん人も。自分を侮蔑する目も、責めたてる口もない。長おさは幸せだった。

「でもそれはわずかな時間だけだったって。草原を見て思い出されるのは、住んでいた町の空き地や森。自分がよくいた場所。そこで長は初めて、自分はある町が好きだったんだと気づいたんだって」

すると、風景が変わり始めた。見渡す限り一面の草原だった場所に、木々や建て物が生えてくる。そのうち電車は駅に止まり、長おさはそこで降りてみた。住んでいた町の、見慣れた駅。人が消えたこと以外は普通の、地元の姿があった。

だからこの世界の入口は草原のだと、マオはしめくくった。私はなぜ彼がこんな話をしたのかが気になった。

「どうしてその話をしてくれたの」

マオの口角がわずかに上がった。だからといって目も笑っているわけではなかった。私の目をしっかりと見つめなおしたそれは、とても真剣な空気を帯びていた。

「僕、ここの住民になることにした」

「え」

このときはまだ「住民になる」ことがどういふことなのか知らなかった。説明されたことも、こちらから尋ねたこともなかったのだ。勝手に、住民たちというのはこの世界から沸いて出る存在なのだと思っていた。でも長ながの話からすると、他の住民もそのような経歴を持っているということなのか。

私にはよくわからなかった。それでも。

マオの、私を見つめる目。

あれを見れば、彼は重大な決心をしたのだと十分に察することができた。

ざわざわと音をたてて、周囲の木々が揺れる。そのたびに足元の光と影のかたちがちらちらと変化した。私の背後には、昔は駅員用だったという苔むした建て物があつた。それは黙りこくつた私たちを決してせかしたりせず、全てを受け入れられるとでもいうような超然とした態度でそこにいた。

「ここの住民になったら、もう元の世界との行き来はできないらしい」

マオが口を開いた。

「人によっては理不尽だと思ふのかもしれない。だけど、それを彼らや僕は望んでいるんだ。自分が選んだ場所で、新しい自分として生きたいって」

私は、思わずつぶやいていた。

「……マオなら元の世界でも大丈夫でしょ？」

マオは静かに微笑んだ。やがてのどからくつくつと声が出て、彼の体が小刻みに揺れ始めた。怖かった。これから何が起こるか分からない恐怖。逃げ出したかったのに、体が金縛りにあつたかのように動けなくなつた。

このまま彼は壊れてしまうのでは、と本気で思つた。悪魔のような耳障りな声をけたたましく響かせて哄笑し、いづれ糸がぶつんと切れるようにそれが止まる。そして全く動かなくなつてしまふ。そんな光景が頭の中で展開されていたように思ふ。

実際はそんなことはなかつた。マオはひとしきり声を抑えて笑ふと、次第に元に戻つていった。

「君も座つたら」

私はマオと同じベンチに、少し間をあけて座つた。

カア、という鳴き声にはつとした。いつのまにか周囲にはたくさんたの鴉たちがいた。木々にとまつている者、地面を歩いている者。それらとは別に、たつた今空から舞い降りてきた鴉がマオの肩にとまつた。

マオは話始める。

「僕のこと、少なくとも川崎真生つていう人間がいることは、だいぶ前から知つていたと思う。うわさになつてゐるらしいから。いじめで不登校になつて、それきり一切学校に來なかつた生徒のことをなぜあんなふうふうに広めていくのかさっぱりわからなかつた」

それは、と理由が口から出かけて、すぐに抑えた。いや、出せなかつたのだ。思つたことをつい言つてしまふ口は、少し離れてこちらを見つめてくる目に勝てなかつた。

「僕、今は全くリースクールに行っていないんだけど、前も三回に一回は休んでたしね。外をぶらついているの、見られたかなあ。……出かけることはね、九歳ぐらいまでは怖かったんだけど、それ以降は何とも思わなくなった」

もう、どうでもいいやーって。

その言葉が虚しく響いた。

「リースクールもいまいちなじめなくてさ。どこにいてもうましくないんだったら、どこで何をしても同じだと思って。でも学校行く気もおきないから、その辺ブラブラしてた」

いじめられてたのに堂々としていて……。

どこで何をしても、同じ。

彼の「堂々とした態度」は諦めや絶望から生じていたのだと、やっとわかった。

「その頃に公園で鴉たちと出会ったんだ。なぜか一部の人はここに来る前から仲良くなってるみたいで。ここに来たのも、この子たちのおかげなんだ。二年前の春、この子たちが『こっちへ来て』って言っているような気がして、飛んでいく方向に向かったら駅に着いた。そこから電車に乗って……」

「ウラ」の世界にはあつという間になじんだらしい。私と違ってマオは、二回目に来たときには住民たちの姿が見えていたそう
だ。

「みんなとても優しくかった。必要以上の干渉はしないでくれる。いじめのことを話しても、早く解決しなきゃとかリースクールにちゃんと行きなさいとは言わなかった。自分の生きたいところ

で生きなさいって言うてくれた」

そうして彼は、自分の人生と向きあい始めた。自分はどこで生きたいか。どう生きるべきなのか。学校には本当に行かなくてもいいのか。「ウラ」へ行くのはただの逃避ではないか。

しばらく考えて、気づいた。

「僕は、やっぱりここにいたいんだ。もちろんかなり迷ったよ。親を置いていくのは無責任かな、とか。でも僕はここでしか思いきり笑えない。生きていることを楽しめないんだ」

私は思い出す。いっしょに遊んでいるときのマオの表情。顔をくしゃつとさせた、無邪気な笑顔。それはあの美しい微笑の何倍も、命のエネルギーで溢れていた。

今思えば、私はマオに惹かれていたのかもしれない。そうでなければ、あんなことは言わなかった。暗に彼を引き止めたいというような言葉は。

そして、引き止めたいと思った時点で、私の心は決まっていたのだろう。

「……君は、どうする?」

今すぐでなくてもいいけれど、とマオは付け足した。「ウラ」に来ることのできる人が、必ずしなくてはいけない選択。

少し考えさせて、と答えた。うつむきがちになっていた顔を上げる。目の前には何羽もの鴉と森ラジオステーション。アブラゼミの声が木々に、苔むした建て物に染みわたっていった。元の世界でも「ウラ」でも穏やかに在り続けるそれらは、私たちを見守っていた。せかしもせず、強いることもせず。陽の光をまとった苔

は、激しい夏の日射しの中でもしんと落ち着いていた。

ふいに、ずっとマオの肩にとまっていた鴉が彼から離れて私の肩にとまった。細い足の指が肩の上をこわごわと動くのは居心地が悪かった。近くで見るとこの鴉はやせっぽちで弱々しかった。しばらくそわそわと動いていたが、やがて止まった。うまく安定した体勢にできたようだ。それなのに、ほっと息をついた瞬間に肩が揺れた。鴉が飛びたつたのだ。

「今、虫を食べたんだよ」

マオが教えてくれた。

その日、もう帰ろうかというところで、私は彼の問いへの答えを伝えることができた。彼の反応はやはり、「そう」だけだった。

夕方までしぶとく駅にいたが、彼には会えなかった。本気で会えるとは思っていなかったが、もしかしたらという淡い期待があったのは事実だ。彼ならありえそうという気が、また。

家路へつく銀色の電車に乗ったときには、辺りはすっかり暗くなっていた。空いている席に座ると、いつもの癖でスマホをいじりだしてしまふ。昔はどこか異世界のもののように感じていたこの電車も、今では日常の一部だ。

私の視線は画面上のネットニュースに向かう。最近は電車に乗っても、あまり景色を見ようとは思わない。そう気づいて、スマホの電源を切った。それでも頭はスマホの画面を見ているかのようにうつむいたままだ。頭を上げる気がしなかった。

あの日の答えは、「元の世界に残ると思う」

私にはマオのように、ここでなければ生きていけないという強い思いはなかった。中学生のときの私は、確かに自分の居場所がないと感じていたのだろう。だけど、私のそれはただの逃避じゃないかと思った。大人になれない私。思いやりに欠け、感じたことをそのまま言ってしまう私。そういうものから逃げているだけだと思ったのだ。

マオとは九月の第一土曜日に会ったのが最後となった。一回だけでもと、こちらの世界の森のラジオステーションへ行ったのだ。彼はここのも魅力的だねと言ったあと、

「長おさやみんなはね、月崎駅が大好きなんだ。自然とアートは誰も仲間外れにしないから。自然はどんな生き物も平等に扱っし、アートは見た人全員が違うことを思い浮かべても受け入れてくれる」

だから月崎駅は僕たちの本拠地なんだと、マオは嬉しそうに言った。「僕たち」。その言葉の中にもう私はいないのだろうと思うと、寂しかった。

私はもう「ウラ」へ行けないだろうと思った。この世界で生きていくと、居場所を作ってみせると決めたから。それを察してかそうでないのか、マオは一度も「また来てね」とは言わなかった。でも、

「いつかきつと思わぬところで僕たちが顔を合わすことがあるよ」
そう言ってくれた。

最後のとき、私とマオはあえて別の電車に乗ることにした。同じ電車に乗っていたのに、いつのまにかマオがいなくなっていたという状況が、耐えられそうになかった。

彼が「バイバイ」と言って電車に乗り込んだ。それきり、彼は失踪した事になっている。

あのときから私もいろいろと考えた。この世界のどこに居場所を作るか。居場所を作るために、どんな努力をすればいいか。

……でも、落ちちゃったもんなあ。

これで完全に夢が絶たれたわけではないが、悔しい。あのときもう少し頑張っていたら、それか無理して浪人していればとずっと考えてしまう。私はここで生きていくという覚悟を誰よりも持っているつもりだった。だが、そうではなかったからこんなに悩むのか。頭ではこれからどうすればいいのかわかっているはずなのに、私の思考はうじうじと行き止まりで足踏みを続ける。

ふと。

カア、と聞こえた気がした。電車はちょうど駅のホームに着こうとしている。カア、と再び鳴き声が聞こえた。かなり近いところから……ああ、私の肩からだ。肩をつかむ固くて細い感触。

思わず顔を上げた。するとまたカア、という鳴き声。今度は肩にいる鴉からではない。開いた電車の扉の、向こう側。

「……マオ？」

見えた気がした、ほんの一瞬。背が伸びて、髪も少し長くなつた彼が、相変わらず白いシャツを着て。その腕には一羽の鴉をとまらせて。

カア、カア、カア。マオや鴉の姿が消えても、あの二羽の泣き声が聞こえている。

鴉はあまり群れでは見かけない。いっしょに飛んでいるのも、

せいぜい二、三羽だ。だけど、まるで共鳴するように、一羽が鳴きだすとその周辺の鴉が次々と鳴き始めるのは見たことがあった。

ありがとう、マオ。

窓の外には夜の暗闇と、いくつもの白い光。そろそろ着くはずだ。大学の近くに借りたアパートのある、私が生きていくところ。

ねえ、マオ。私は信じていればいいんだよね。自分の選んだ道が最善であることを。そこから、私が心の底からいたいと思う場所に辿り着けることを。

あなたがついていてから。

電車はだんだんとスピードを落とすしていく。あと三十分もすれば、私は自分の根城で夕飯の仕度でもしているのだろう。